

シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

配布資料：https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/symposium/6th/lib_and_post_truth1.pdf

(永田)

皆さまこんにちは、未来の図書館 研究所の永田治樹と申します。本日はお忙しいなか、シンポジウムのご参加ありがとうございます。

私どもの研究所も軌道に乗るようにと務めているうちに5周年を迎え、本日は皆さまのご参加をいただき、第6回シンポジウムを開催する運びとなりました。昨年と同じように一堂に会することはできませんので、リモートでの開催となりました。コミュニケーション媒体としては、ZoomとYouTubeを使っておりまして、ただいま百数十名の方が全国からつながってくださっていると思います。

私ども未来の図書館 研究所は、図書館づくり、あるいは運営に関する調査研究や、課題解決支援を事業として行っております。なにぶん非力な所帯ですので、なかなか思うようにはまいりません。しかし、スタッフ一同今後も初心を忘れず頑張っていく次第ですので、皆さまのご支援、ご鞭撻を引き続きお願い申し上げます。ご参加の御礼と、このお願いでもって、冒頭のご挨拶にかえさせていただきます。

ここからはコーディネーターとして、シンポジウムの進め方について説明いたします。まず私のほうから15分程度、本日のシンポジウムの趣旨についてご説明し、その後、若干の事務連絡などをお伝えし、笹原和俊さんから40分ほどのご講演をいただきます。画面の切り替えや質問をまとめていただくために5分の休憩を入れ、さらに伊藤智永さんに同じく40分ほどお話をいただきます。そして15分ほどの休憩をはさみ、質疑を含めたディスカッションを行ってゆきたいと思えます。本日は、お二方のお話を伺い、ネットを通して議論していただき、皆さんが、それぞれの成果をみていただければと存じます。

今回のシンポジウムのテーマは「図書館とポスト真実」であります。「ポスト真実 (post-truth)」という言葉が、2016年に権威ある英語の辞書『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー (The Oxford English Dictionary : OED)』によって、「今年の言葉 (Word of the Year)」に選ばれました。英国のEU離脱に関する国民投票と、米国の大統領選挙の関係でこの言葉が、その年に、前の年に比べて20倍も多く使われたといえます。その意味は、ここに掲げましたように、「客観的事実よりも、感情的な訴えかけや個人の信念のほうが、政治的議論や世論形成に大きく影響する状況」をいいます。いうならば、人々は事実をときによって無視して、自分の思い込みで事態を解釈するほうに、傾いているというわけです。

ただし、これは2016年の状況だけの話ではありませんで、後ほど伊藤さんから、ポスト真実の文脈がどのようなものだったかをご説明いただけたと思います。また現在も、ごく基本的な科学的事実だと思われてるような、例えば温室効果ガスの影響や、コロナワクチンの有効性の問題に関しても、それぞれの思い込みや党派的な見方から異なる真実が語られたりします。「ソーシャルメディアは気持ちが良いので、読者が喜んで自分の欺瞞に参加するポスト真実の冥界 (地獄) になりました」というのはグラスゴーにある『ヘラルド (The Herald)』という新聞の記事の表現なんです

が、やはり OED に、ピックアップされています。それで、このような状況が拡大したきっかけというのは、ヘラルドの記事が示唆するように、インターネットによるところです。コーネル大学のロナルド・エレンバーグ (Ronald G. Ehrenberg) は、インターネットはわれわれのゲームを変えてしまったんだとっております。

社会において人々は、基本的には客観的な情報に基づいてやりとりしますが、事実誤認などの誤った情報や故意に広められた詐欺的な偽情報も受け取ります。フェイクニュースというのは、これら誤った情報や偽情報をインターネットなどのメディア上で拡散し、一見、ニュースのようなストーリーにみせかけ、政治的な影響を与えることを目的とするものです。ときには、単なる冗談であるということもございますが。笹原さんのご講演では、このあたりの点について、さらには人々の認知の問題を含めて、詳しくお話しいただける予定であります。

そこで私どもはなぜこの問題を取りあげたか、ポスト真実がなぜ図書館で問題となるのか、皆さんご案内のことだと思いますが、あえて申し述べると、こういうことです。

フェイクニュースは、正確な情報の伝播を阻害します。そして人々の認識を歪め、人々のつながりを分断し、民主主義を蝕むものであります。また、それは図書館が果たしてきた、正確な情報へのアクセスの提供、コミュニティを育むという役割と逆に作用するものです。長い間『ライブラリー・ジャーナル (Library Journal)』の編集に携わってきましたベリー (John Nichols Berry III) さんという方が、以前コラムに、このことは「おそらく図書館史上最も困難で重要な課題」になると書いてました。

これに対して図書館はどういう姿勢を取ってきたかっていうと、次のようなものです。一つは図書館の、世界人権宣言に綴られた、知的自由を擁護・推進する対応であります。日本図書館協会の「図書館の自由に関する宣言」では図書館は国民の知る自由を保障する機関として、国民のあらゆる資料欲求に応えなければならないとしています。資料・情報の収集・提供は図書館の日々の営みで、私どもがさほど意識してないのですが、実は大変重要な課題です。出版されてもすべての人が資料を購入できるとは限らないし、あるいは、絶版などのために既に市場で入手が難しい状態の図書もあります。それらを一般住民に無償で閲覧ないし貸出し、図書館は人々の情報を受け取る権利を実質的に保障していると考えますと、この問題の重要性は認識できます。またその範囲は今や、図書、雑誌、紙の媒体だけでなくネット上の情報にも及びます。

ご案内と存じますが、表現の自由の保障のあるべき姿から、図書館をめぐる問題にさまざまな場面に分けて検討を加えた法学者の松井茂記さんという方が、『図書館と表現の自由』というご本をお書きになってますが、これは大変参考になる本です。

もう一つは情報リテラシーの支援です。図書館は単に資料・情報を確保しておくだけではなく、それが自主的に利用するところにつながるように、情報リテラシーの支援をいたします。これも知的自由を擁護する文脈に含まれます。情報リテラシーというのは大変広い概念ですが、児童のサービスから始まって、新しい情報機器の使い方、あるいは情報の確認の手法など、いろんな意味合いで、さまざまな場面で使われますが、そのすべてが対象です。そして、今ではこれまでになかったようなポスト真実をもたらしている新たな情報の生成・流通状況を理解し、それに応じた積極的な情報リテラシー支援が求められているというわけであります。

とはいえ、図書館がうまくやっているかといわれると、どうでしょうか。ハーバード大学のワイドナー記念図書館の M・コナー・サリバン (Matthew Connor Sullivan) が 2019 年に「図書館員は

なぜフェイクニュースと戦えないのか」という論文を書いておまして、図書館員がフェイクニュースを遮断することは困難であり、図書館員はフェイクニュースの状況を理解していないし、フェイクニュースがもたらす事態への理解が浅くて、それを回復する対策ももっていないとっております。

そのようなことで、一つ前のスライドに基づいて、改めて図書館にどのような対応を求められているか確認してみますと、1番目の領域（公平なコレクション）に関しては、資料情報へのアクセスを保障するということを図書館は確実に担保しなければいけないんですが、例えば、図書館員が内容に係る主観的判断によって特定の図書を廃棄してしまったような事件がありました。これに対して裁判において知る自由を侵したという判断が下っております。ただし、日本の図書館は、そうした偏った管理をしている図書館はあまり多くないという調査研究もあります。とはいえ、インターネットサービスに関しましては、割とフィルタリングをかけている図書館が多くあると思われます。フィルタリングとは、たいてい幅広く情報を遮断するものですから、ときに知る自由を侵す可能性があるといわれていますので、各図書館では、これらの点を改めて点検し、そのようなことにならないように対応していく必要があるかと思えます。

たまたま先週、「アメリカン・ライブラリーズ (American Libraries)」というメールマガジンの11月1日号をみていたところ、米国では図書館評議会の理事などに、これまで図書館が守ってきた知的自由の原則に挑むような人が立候補するようになったという記事がのっておりました。この例では、図書館には人々の多様性を認め合う多文化サービスがありますが、そんな多文化サービスを展開するよりも、もっとまともな英語を喋れるような便宜を高め、英語中心の価値を、きちんと伝えるようなサービスすべきだという主張のようです。性同一性の問題や人種問題を忌避しようという動きもあり、ポスト真実後のアメリカ社会の分断が図書館に波及しているようです。アメリカ図書館協会 (American Library Association : ALA) は、これに対して各図書館の方針・ガイドラインをきちっと文章化することをすすめておりました。

2番目の情報リテラシーと言われる領域に関しては、国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions : IFLA) がつくった「偽ニュースを見極めるためには」(図1) というポスターがあります。井上靖代さんが日本語に訳されていて、日本でも広がっていると思います。基本的な前提ではありますが、先ほどのサリバンのような形式的な認識だけでは、フェイクニュースには対応できない恐れがあるというようなことをいっておまして、われわれももっと、その実態はどんなものか、またフェイクニュースを流布させる情報環境がどのようになっているのか、きちっと理解しなければいけないと思っております。そこで、フェイクニュースの拡散や認知バイアスの枠組みを理解し、ニュースの現場を押さえてポスト真実下の図書館がなすべきところを考えよう、というのが今回のシンポジウムの趣旨でございます。



図1 偽ニュースを見極めるには

(出典：IFLA, <https://repository.ifla.org/handle/123456789/223>)

早速、お二方にお話を頂戴したいと思います。最初にお話しいただく笹原さんは、ポスターでご紹介したように、現在、東京工業大学環境・社会理工学院にいらっしゃる計算社会科学という分野の研究者でいらっしゃいます。お話しいただくフェイクニュースの研究を始められたのは、実は2016年二度目の在米研究でインディアナ大学にいらっしゃったときだということです。また高校時代以来、図書館の熱心な利用者だとウェブで紹介されておりました。それでは、笹原さん、お願いいたします。